笛吹川

深沢七郎

竹内吹川

深沢七郎

笛吹川　深沢七郎著

定価　二八〇円

昭和三十三年四月十日　初版印刷
昭和三十三年四月十五日　初版発行

発行者　栗本和夫
印刷者　柳川太郎
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二丁目一番地
電話(56)五三二番　振替東京三四番

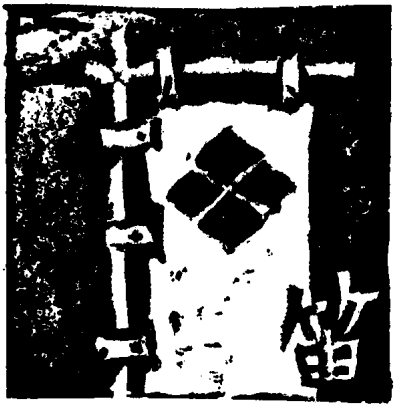
検印廃止

(凸版印刷・協和製本)

笛吹川

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一



吹橋の石和側の袂に、ギッチョン籠と呼ばれているのが半蔵の家だった。敷居は土手と同じ高さだが縁の下は四本の丸太棒で土手の下からささえられていて、遠くからは吊られた虫かごのように見える小さい家だった。村の人達は半蔵のことを「ノオテンキの半蔵」と云って怖れていた。ノオテンキということは馬鹿ということではなく向う見ずという意味だった。こないだまで鼻ッたらし小僧だった半蔵が、この頃、急に背丈が延びて、年は十六だが父親の半平より大きくなった。ふだんはおとなしく、まじめで稼ぎ者だが癇癪を起こすと暴れ馬よりも仕末が悪く、いつかの喧嘩の時にも、逃げる相手を追いかけて土手の急な曲り角を、相手は曲って逃げたが半蔵はまっしぐらに土手下へ飛び降りた。両手を拡げて足を揃え、パッと飛び降りた地響きに振り返った相手

の方がまっ青になって立ちすくんでしまった程だった。あとで半蔵は「道が曲ってるなんてことはわかっていたァ、めんどくせえからまっすぐに飛び降りたのだァ」と云っていた。村の人達は「怒ると何をしでかすかわからない」と云って、おとなしい時でも一目置いていた。

ノオテンキの半蔵が四、五日前、家を出たまま帰らないことは村の人達も気づいていた。だが、家の者達は心配もしていない様子なので村では誰でも不審に思っていた。その半蔵が、さっき、しょんぼり帰って来たのである。家の前で立止って、横へ廻って縁の下へ降りて行った。降りながら左手をのばして、もうしなびそうになってしまったブドーの房をもぎりとった。下に降りたが縁の下の丸太棒のそばにしゃがんだままなにも云わないのである。右手を左の脇の下にはさんで、左手に持っているブドーの房へ食いつくように口を当てては、食べた皮をぷッ、ぷッと土の上へ吹きとばしていた。ギッチョン籠の上では裏側の手すりから乗り出すように半蔵のおじいが顔を出して見おろしていた。手すりの隅では父親の半平が帰ってきた伜を見ようともしないで草鞋をなっていた。おじいは半蔵が何を云うのか大体察しがついていた。孫の半蔵がお屋形様の合戦について行ったことを村の人達には内緒にしていたのだった。帰って来てから云いふらすつもりでいたのだが、あんな所にしゃがみ込んでブドーばかりを食っているのである。下ばかりを向いていて、こっちも見ない様子では、きっと、いくさに行ってもうまいことはなかったらしいのである。婿の半平は「よせ〳〵」と止めたが、やっぱりその通りで「行け〳〵」とすすめた俺の方がさきの見とおしがつかなかったことになってしまったのである。伜の半平は婿に来た男であ

る。孫の半蔵をいくさにでも行かせて、この家もなんとか盛り立てなければと思ったのだが、これでは村の人達に顔がつぶれるどころか婿の半平にまでも顔が立たないことになってしまったのである。半蔵がいくさに行ったということは隠していてもすぐ村の人達には知れてしまうのである。なんとか理窟をつけて孫の顔を立たせてやりたいものだと思ったが、どういう風に云い出したらよいものか？　と困っていた。だが、困ったような顔つきもしないで半蔵を見おろしていた。孫は四人もあるが男は半蔵だけだった。婿の半平などは意気地なしでのろまだから話相手になるのは半蔵だけだった。その半蔵が今、云うことに困ってあんなところへしゃがみ込んでいるのである。なんとか云って智恵を貸してやりたいのだがうまい考えも浮ばなかった。

おじいは半蔵を見おろしながら慰めるように云いだした。

「なァ、いくさに行っても一人じゃ駄目ずら、女ばかりもったじゃァ、男が一人じゃどうしようもねえら」

これは婿の半平にも云っていることだった。なんでも半平のせいにするような云い方をすればこの場合はよいと思ったのだった。半蔵は下をむいたままだが、

「なーに、わけはねえ、いくさなんてものはわけはねえものだ」

と、呑気そうなことを云い出したのだった。（アレッ？）とおじいは思ったが半蔵が痩せ我慢で強がりを云っているのだと思った。

「それじゃァ、いくさに行ってうまいことでもあったのか？」

と聞いてみた。半蔵は下を向いたままブドーの皮をぷッと吹いてまた一口云った。
「うまいどころじゃァねえ」
そう云ってまたブドーの房へ食いついて皮をぷッと吹くと、
「駿河の奴等なんかを追っぱらうことは、わけはねえ」
と云うのである。おじいはホッとして、
「そうかァ、敵はそんなに弱かったか、うまくいったなァ」
と云った。半蔵は下を向いたまま、小さい声で云いはじめた。
「飯田河原にふた月も陣を張っていた奴等はみんな逃げてしまったぞ、わけはねえことだ」
そうすると草鞋をなっていた父親の半平が半蔵の方は見もしないで、
「その敵はどこへ帰ったずら？」
ときいた。おじいがあわてて云った。
「バカ、敵が逃げてどこへ帰ったかだと？　バカの奴だなァ、なにを云ってるだ」
怒られても半平は、
「それでも、また攻めて来るかも知れんぞ、この家にいることがわかれば、この家へ仕返しに来るかも知れんぞ」
と、つぶやいた。
「バカの奴だなァ、追っぱらって逃げた奴がまた来たところで何が出来るものか、てめえなど黙

ってろ」
おじいはこう云ったが、でかい声をだして、
「いくさも敵の大将の首でも取らなきゃァ、うまいこともねえら」
と云った。半蔵は始めて上を見上げて、
「首は取らなんだけど敵の大将は死んだぞ」
と云うのである。おじいはびっくりして、
「エーッ、おめえが殺したのか？」
と聞いた。半蔵の方でもあわてて手を横に振った。大きい声で、
「俺が殺したのじゃねえけど、俺が追いかけたのだ、殺したのは俺の旦那だ」
と云った。おじいはパッと表へとび出して横へ廻って土手を駈けおりた。半蔵の横にしゃがみ込んで、
「それじゃァ、おめえが殺したも同じことじゃァねえか、えらいことをしたなァ」
と云って目を丸くして半蔵の顔を眺めた。半蔵はまた小さい声で話しはじめた。
「旦那が俺の馬に乗って、俺が馬の口をとって乗り込んだだけだヮ、わけはねえことだ、向うの馬のつらに俺が高ッ飛びにドスンと胸をぶッつけたら、向うの馬など横ッ倒しになってなァ、向うの大将などひっくり返って起き上れなんだヮ、俺の旦那も転がり落ちたが、すぐに起き上って向うの大将を殺してしまったのだヮ、わけはねえことだ」

そう云いながら半蔵はふところから布のたたんだものをとりだした。ニヤッと笑いながら立ち上って、右の手を差し出すようにして拡げると長い布である。

「こりゃァ、お屋形様の旗じゃねえか、武田菱の紋どころの！」

と云って、おじいはまた目を丸くした。

「こんなものは欲しけりゃいくらでも持ってきてやるぞ、これを竿にさして、これと一緒に俺が飛び込んだのだァ」

「そりゃァ、いつだ？」

とおじいが聞いた。

「きのう、甲府の向うで、飯田河原でやッつけたけんど、旦那が石水寺のお城へ帰ったから、俺もちょっと帰ってきたのだ」

そう云って半蔵はまたニヤッと笑った。

「えらいことをしたなァ、おめえが敵の大将を殺したのも同じことじゃねえか、そのくれえのことはすると思っていた、おめえが行けば、只じゃァ帰って来んと思ってた」

おじいはそう云うとすぐ立ち上った。上の方を見上げて半平に向って、

「見ろ、俺が行け行けとすすめたから半蔵は敵の大将をやッつけたのだぞ、草鞋などばかりなわなくて、早く竹野原へ行ってそう云って来い、半蔵が敵の大将をやッつけたことをそう云って来い」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、でかい声で怒鳴った。竹野原は半蔵の姉のミツが嫁に行っている処で、一里も離れた山の方である。半蔵が手を横に振って、

「あわてるこたァねえ、そのうちにわかるら」

と云って、ニヤッと笑った。それから、

「まあ、そのうちに俺の旦那がこの家へ来ることもあるぞ、土屋様という人だ、この家の前もよく通ることがあるそうだ、ギッチョン籠のような家だと云ったら知っていたぞ」

と云うのである。おじいはまた驚いて、

「この家へ来ると？　本当か？　えらいことになったなァ」

と云った。それから半蔵の肩をつついて、

「お屋形様の信虎様は竹野原へ嫁に行ったミツと同じ年で二十八だ。お屋形様へは男が生れたが、こっちは女だった。この家は女しか生れんから情ねえと思っていたが、おめえが敵の大将をやッつけたのだから」

と云って上を見上げた。半平に、

「こんなギッチョン籠の家は」

と云って、おじいは丸太棒に手をかけてゆすりながら、

「こんな家はつぶして、でかい家を作るようになるぞ、俺もおめえもヤモメだが、半蔵にはいい嫁が来るぞ、それもみんな俺がすすめたからいくさに行ったのだぞ」

と云った。その時、ギッチョン籠の表側で馬の足音がしたかと思うと何か大声が聞えた。下で半蔵が、

「あッ！」

と云って跳ねるように土手を駈け上って行った。すぐ表の方で半蔵が、

「お屋形様から呼びに来たから行ってくるぞ」

と家の中へ怒鳴った。おじいが急いで表の方へ行ったら、半蔵はもう迎えに来た人の乗っている馬の口をとって暴れ馬のように駈けだしているのだった。おじいは敷居に片足を上げて半平に、

「褒美をくれるのだぞ、どうだ！　うまくゆくときはこんなものだ、まあ、何をくれるか貰って来なければわからんけど、えらいことをしたものだ、俺が行け行けとすすめたからだぞ」

半平も草鞋など作るのは止めてしまった。立ち上って、おじいの方へ手を差しのばして、

「俺だって、腹の中じゃァ、行け行けと思ってたのを知らなんだのけ？」

と、恨むような目つきでおじいを見ながら云った。半平がこんな云い方までして、いくさに行くのを止めさせようとしたことを謝まっているのでおじいは始めて嬉しそうな顔を半平に見せたのだった。ニコニコしながら、

「いまごろわかったか、俺の予想はなんでも当るのだぞ、俺の云うことに間違った験しがねえ、竹野原へ嫁に行ったミツなども帰(けえ)ってくるようにするぞ、この家を馬鹿にするようなところへ嫁にやっておけるものか！　すぐに帰って来るようにするぞ」

と云った。それから半平をちょっと睨んで、
「ほれ、あそこの、坪井の……」
そう云いながら右手の親指を笛吹橋の方へむけた。その時、表で馬の足音がした。おじいと半平が表へ飛び出して見ると半蔵が馬の上から見おろして、嬉しそうにおりて来た。おじいはニコニコしながら半蔵の耳許へ口を近づけて、
「褒美をくれたか？」
ときいた。半蔵の方でもニコニコしながら、
「すぐにはくれないさ、後でゆっくり決めてくれると思うけんど」
半蔵はそう云いながら横へ廻って土手下へ降りてゆくと鍬を握って上ってきた。
「さあ、お父っちゃん、これを持って一緒に行ってくれ、えらい用を云いつかったぞ」
そう云いながら鍬を半平に渡して、
「お屋形様へ、ゆうべ男の坊子（ボコ）が生れたのだぞ、その後産（のちざん）を埋める役を、お父っちゃんが云いつけられたのだぞ」
と云った。聞いていたおじいは飛びつくように半平の手から鍬を奪いとってしまった。怒って、
「バカ、てめえなどにそんな用を云いつけられるわけがねえ、半蔵が手柄を立てたからだぞ、俺がすすめたから半蔵がいくさに行ったのだぞ、てめえなどにそんな用を云いつけられるわけがねえ、俺が行くからいい」

そう云いながら鍬をかついで、おじいはもう歩きだしていた。半蔵を振り返って、
「さあ、どこへ行くだ？」
ときいた。半蔵は馬に跨っておじいを見おろして、
「川田へ埋めるのだそうだ。石水寺のお城で生れたけんど、石和が元のお屋形だから、石和のお屋形から見た方角で川田へ埋めるのだそうだ、待ってるから早く行かなきゃ」
と云った。
「エッ！　もう持って来てあるのか、それじゃ急いで行かなきゃ」
おじいは急に駈け出した。半蔵の乗っている馬に負けるものかとおじいは狂ったように走り出した。着物の前がひろがって、脱げそうになっても片手に鍬をかついでいるので着物を合せることも出来なかった。前をひろげたまま息を切らして石和の屋形の門のところまで駈けて行った。半蔵だけ門の中へ入って行って、おじいは門の横で待っていた。ハァハァと息をして待っていると門の中から年とった人が二人あるいて出てきた。すぐ後から風呂敷に包んだ箱を持った人が出てきた。その後から半蔵が出て来たのである。半蔵はおじいのそばへ来て、
「さあ、一緒に行かざァ」
と、早口で云った。おじいは半蔵の後を黙ってついて行った。川田の村へはいるとすぐ右へ廻って出圃道をオキ村の方へ行くのである。オキ村へ埋めるのかと思っていたら、やっぱりそうだった。畑の中の石垣の横で、先の二人が立止った。何か云ってる中に塩をまいた。一人が口の中

でブツブツ拝んでるような様子である。そのうちに拝んでいた人が塩をまいた所へ指をさして半蔵に、

「ここへ埋めるのだ」

と云った。すぐ半蔵がおじいの肩を押して、

「早く掘って埋めるだとォ」

と教えたのである。おじいは躍り込むようにその土の所へ行って両足を拡げた。ザクッと鍬を入れたら土の下にでかい石があった。鍬を横へ置いて、両手で石を持ち上げて除けた。それから鍬を持って力を入れてザクッと掘った。ハッと思ったら左足の下から鍬の先が湧いてきたように出てきた。(足を掬ったッ!)と思ったら踵から上へ五寸も開いたように肉が見えた。痛いなんてことより、大切な時に、まずい掘りかたをしたものだと、おじいは恥かしくなってしまった。うしろを振りむいて見るとお屋形様の人達は顔をしかめていた。すぐまた鍬を振り上げて二度目を掘った。だが、

「止めろ」

と、うしろから怒鳴られてしまった。おじいは首をすくめて下を見ていた。左足から血がこぼれるように流れてきた。

「芽出度い御胞衣を血で汚がした馬鹿者ッ」

と、うしろからまた怒鳴られた。半蔵がとんできて、

「どいてろ、俺が掘るから」
そう云いながら横から鍬を取ってしまった。おじいはそばにいては悪いと思ったので足をひきずりながら五、六間ばかり離れたところへ行って傷のところを手で押えていた。半蔵が土を掘って後産を埋めてしまうと、みんな黙ったまま帰って行った。
その晩おそくなってからおじいを石和の屋形から迎えに来たのだった。
「こんな夜中に？」
と云ったら半平がそばで、
「怪我がひどいから、わしが代りに行って来ようか？」
と云った。おじいはあわてて、
「バカ、褒美をくれるかも知れんぞ、半蔵と一緒に」
そう云って起き上った。迎えに来た人に抱かれて馬に乗って出て行って間もなかった。半平は娘二人と寝もしないでおじいの帰って来るのを待っていると、表の戸がそっと開いて半蔵が顔だけだした。手招きしながら、
「おい、ちょっと」
と云っただけで行ってしまった。半平は急いで戸口まで行って外を見ると橋のすぐ横に四、五人立っているのである。外へ出てゆくと一番先にいるのが半蔵だった。半蔵はささやくように云うのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com